

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

スリザリン生の優雅な生活

### 【作者名】

モンコ

### 【あらすじ】

ラーニヤ・ギルテイク。

高所恐怖症で空を飛べない魔女が、持ち前の努力と根性でなんとか頑張る話。

「皆さん、ご存じかしら。私の趣味は、空を飛んで得意げになっている愚か者を地面に落として、

その惨めで憐れで情けないさまを眺めることですのよ」「よ

(私、入学当初はこんなキャラじゃなかったのになあ……………)

## ラーニヤ・ギルティク

「ふう……」

ホグワーツ行き列車の中で、ため息をつきながら、少女は窓の外を見る。

(……私、ハッフルパフに入りたい)

少女の名はラーニヤ・ギルティク。

名門中の名門、ギルティク家の次女である。

黒い艶やかな髪、長い睫、みどりの瞳がその証だ。

(私なんて、きっと落ちこぼれてしまっわ……。お母様のご学友のスネープ先生は、とても厳しい方だと聞いたし……)

悩ましげに頬杖をつく美少女の姿は、まるで一つの絵のようだった。

「よーっす」

「お隣、じゃましていいかい？」

「あ、ああ。どうぞ」

「あんがとさん」

「へへ、と笑いながら双子の少年が入ってきた。  
燃えるような、赤い髪である。」

「お名前は？」

「フレッド・ウィーズリーだよ。こっちはジョージ。見てわかるとおり、双子さ」

「そちらは？」

「ラーニヤ・ギルティクと申しますわ。よろしく」

にっこりと笑って、握手をする。

私自身でそんなつもりはないのだが、私はどうも顔が怖いらしい。「綺麗ですね」「可愛い」「とはよく言われるし（こんな言い方をするとナルシストっぽい）、鏡を見てもそこまでひどい顔ではないように見える。

だがしかし、どうも、なんというか……顔が、悪役っぽい。

悪そうに見える。

ふわふわとした白いドレスよりも、シックな黒いドレスがしっくりきてしまうのだ。

だから、第一印象でちゃんと笑顔を見せ、悪い印象をもたれないようにしなくてはならない。

「ギルティクって言えばお嬢様じゃん？　すごいな」

「そんなことありませんわ。特に私は。今年新生人なのでですけど、貴方がたも？」

「そうなるな。ははは、同級生だ」

「キミ、どの寮に入りたいの？」

「そう……ですわね、私は、ハツフルパフがいいです。家族はみんなスリザリンなのでですけど、スリザリンって、ちょっと怖くて……」

「ふうん？　俺はグリフィンドールがよかったんだけど……、こんな美人がいるなら、ハツフルパフにしようかな」

「あつ、ずるいぜジョージ」

しばらくして、列車がとまった。

あの二人がいるならグリフィンドールもいいかなと、少し思った。

## 組み分け式

組み分け式が始まった。

順番に名前が呼ばれていくらしい。

ああ、どうしよう緊張してきた……。

「ロザリオ・アルナティア！」

「……はい」

だるそうな声とともに、明らかにサイズの合っていないローブを着た少女が前に出る。

のたのたと椅子に上がり、ぐでんと海洋生物のように座った。帽子がかぶされる。

「スリザリン！」

「……あらら。」

そこまで性格悪そうには見えないのに、実は腹黒かったりするのかな。

まあいいか。

次々に名前が呼ばれていき、ついに

「ラーニャ・ギルティク！」

「はいっ」

緊張したまま椅子に上がった。

「組み分け帽子を……」

「ん？ おお、スリザリンだな」

「ちょっ、まだかぶってもないのに!」

お前絶対に私の顔で判断しただろ！

顔で判断なんかされちゃ困る、絶対、絶対に！

「はいはい、かぶったな？ スリザリン」

わああ、と拍手が起る。

……なんてことだ。

「冗談じゃない、スリザリンなんかに入れられたら私はいじめられるに決まってる。

何をやってもとろくさかった私だ、きつと魔法もできないに違いな

胃がよじれるような思いで、それでもなんとか笑顔を保ってスリザリンの席に着く。

「ねえ、あの子すごく美人じゃない……?」

「そうよね、可愛いわあ……、でもお人形さんみたいで近寄りがたいわね……」

きゃああホラ噂されてるよお！（噂が聞こえていない

「あ、あのっ、先輩方!」

「ああ、はい?」

二人で話していた先輩方に話しかけて、満面の笑みを浮かべる。  
くっ、ほっぺたがつりそう!

「えっと、この寮を担当する先生はスネイプ先生？ですよね？ どのたですか？」

「ああ、えっとね……、居た、あそこの先生よ。黒い髪の、無表情な」「んーっと……、あ、あの方ですか」

本当はだいたいわかっていたけれど、悪い噂が広がらないようにするため注意しなくては。

お母様は同性からの評判が異常に悪くて、ビッチだなんだと言われていたらしいから。

私も気をつけなきゃ。

「ありがとうございます」

「いえいえ。さっきね、貴女が綺麗よなって話してたところなの。この子とね」

「見た目が凛としてたから、ちょっと近寄りたかくなって思ったんだけど。話しやすくてびっくりしちゃった」

「そんな……、先輩方のほうが全然綺麗じゃないですか。私なんて大したことありませんわ」

しばらく、先輩方二人とお話する。

意外といい人たちだった。

スリザリンは怖いって聞いたけど、そうでもないのかな？

「諸君、入学おめでとう！」

……………え？

やばっ、先輩たちと話してたせいで聞いてなかった！

フレッドさんとジョージさんは!?

居た、グリフィンドールのところだ。

いいなあ……と羨ましそうに眺めていると、二人同時にウインクをされた。

……まあスリザリンも悪くはないかもしれないし。

いいもん、いいんだもん。

寮にて

「ラーニャー！」

寮に帰ると、姉さまが私を見つけて駆け寄ってくれた。

「おめでとう、スリザリンへようこそ！ 私のかわいい妹！」

「姉さま、恥ずかしいですわ……」

「ん、すまんすまん。ははは、列車の中では監督生の席に居なければならなかったが、無事にこれたんだな。立派だ」

くしゃくしゃと、私の髪をなでる。

姉さま、ライラ・ギルティクは、スリザリンの監督生で、今年六年生になる。

私がお母様と瓜二つなのに対して、姉さまはややお父様似だ。

ただ、緑の目、黒い髪、長い睫は変わらない。

髪をポニーテールにして、凜とした姉さまが、私はずっと好きだった。

姉さまの出来が良すぎるから対比されることもあったが、でも、それでも憎めないくらいに姉さまはいい人だ。

「ギルティク、何をしている？」

「おや、スネイプ先生」

後ろから声がして、振り返るとスネイプ先生がいた。

「もう消灯時間だぞ。部屋に帰れ」

「本当ですね、気が付きませんでした。ありがとうございます」



「ん。それは妹か？」

「あ、はい。ラーニヤです」

ぺこりと頭を下げ、スネイプ先生を見る。

「……ふむ、若いころの母親そっくりだな」

「まさか。よく見てください、ラーニヤはもっと可愛いでしょう」

「ちよっ、姉さま……！」

スネイプ先生は、ふん、と鼻で笑っていた。

顔が真っ赤になっていくのを感じる。

恥ずかしさのせいで弁解の言葉が出なかった。

「さ、戻れ」

「はい。良い夢を、スネイプ先生」

「おやすみなさい……」

恨めしそうに姉さまを見ると、ウインクをされた。

一日に三回もウインクされたなんて、初めてだよ……。

初日。

初日の一時間目は、スネイプ先生の魔法薬学だった。  
一応は教科書を丸暗記してきたものの、やはり不安だ。

しかもなんか怖いこと言ってるし。

……スネイプ先生って、本当は闇魔法に詳しいらしいけどなあ。  
杖を振るような野蛮な、とかなんとか言っちゃって、実は先生つた  
ら闇魔法防御の授業がやりたいんでしょ？

まあ、希望が通らなかつたのにモチベーションをあげるた  
めには、あれくらいしなきゃいけないのかもしれない。

ノートを必死でとっていると、いつのまにか後ろにスネイプ先生が  
いた。

「良いノートだ。諸君、ギルティクを見習つように」

……おお？

褒められたぞ？

「すごいじゃん、えっと、ラーニヤちゃんだっけ」

にやにやと猫のように笑う、小さな少女に話しかけられた。  
茶髪をツインテールにして、ネクタイはゆるくしめている。  
ローブが大きいのか、袖を何重にもまくっていた。

たぶん同じ部屋の子だったと思う。

「あたし、ロザリオ・アルナティアっていうんだ。ロザリーでいいよ」  
「ええ、ロザリー、よろしく」

授業終了の合図で廊下に出る。

一時間目は、えっと、確かマグル学だ。

「ねー、マグルのことなんか知ってどうすんだろっねー？ 意味なくない？」

「そうでもありませんわ。マグルと友好的な関係を持つことは重要で  
すもの」

「そうかじゃー？」

ロザリーがうつなりつつ、頭を抱える。

「あたし的には、ただでさえややこしい勉強が増えるからやめてほし  
いよっー」

「あはは……、それは仕方ないでしょう。さ、頑張りましょっよ」  
「っーい」

だるそうに、ローブを引きずりながらロザリーは返事をした。

スリザリンではよくあることです。

「んお。あれ、どしたんだろ」

「? なにがです?」

ロザリーの指差す方向を見ると、人だかりができていた。どうもスリザリンの生徒のようだが、どしたんだらうか。

「おい『穢れた血』! 新学期には退学しとけつつたろ!? なんで来てるわけ!?!」

「うーわ、さっすがwwwひでえwww」

「なーんだ、イジメかあ。つまんないのー。行く? あれ? ラーニャ?」

「先輩がた、なにをしてらっしゃるんですか?」

「ん? おー、新入生か。コイツ、穢れた血なんだよ。知ってる?」

「存じております。グリフィンドールの方ですね? 立てますか?」

「え? ……あ」

手を伸ばすと、グリフィンドールの先輩は恥ずかしそうに眼をそむけてしまった。

まあ、確かに仕方ないか。

私は年下で、しかも女で、この方は男だ。

「ラーニャ、行くつよおー」

長い裾をずるずると引きずりながら、ロザリーが歩いてくる。

「そんなんほつとけばあー? イジメなんて、するやつもされるやつ

もくだんねーもんだぜー」

「……なんだと？ 新入生」

「あ、怒ったあ？ すんませえん、そんなつもりじゃなかったんですけどお」

挑発的にロザリーがわらったところまで、

「なにをやっているんだ貴様らは！」

と、姉さまの怒号が聞こえた。

「グリフィンドールの生徒と問題を起こすなど、何度言えばわかる!? 貴様ら、いい加減にしろ!! 呪いと拳、どちらがいいか選べ!!」

「うっへ……。相変わらずだな、姉御は」

「黙れ！ 君、大丈夫か？ 立て。よし、怪我はないな。うちのものがすまなかった」

「あ、いえ……」

姉さまの剣幕に、皆がぽかんとする。

「貴様ら、こい！ 本っ当に、いつもいつも……」

「痛っつって!!!」

「うるさい、グリフィンドールの青年はお前らよりも痛かったはずだ！ お前が成績いいのに監督生になれないのは素行が悪いからだぞー」

かくして、姉さまは嵐のように去っていった。

「……あはは。あれ、君の姉さんのライラ・ギルティクでしょ？」

「え、ええ……」

「楽しそうじゃん」

にんまりと、ロザリーは笑った。

「うおっ、やべえ！ 時間がねえ！」  
「え？ きゃあ、大変！」

## 蛇寮で生き残るために

夜、寮にて。

「ラーニヤさあ〜」

ぐったりと、ベッドにとけるような姿勢で、ロザリーが話しかけてくる。

「イジメになんか首突っ込まないほうがいいよあー？ あんな、キミのお姉さんみたいな性格なら大丈夫だけどさあ。キミ、優しいし」

「そんなことありませんわ」

「あるから言ってるの」

怒ったように、ロザリーはその小さな腕で枕を殴った。

「スリザリンって、もっと性格悪いやつらが集まるんじゃないの？ キミなんか、帽子のお墨付きでスリザリンにきたくせに」

「んー。それは、たぶん、私の……家系と、顔？」

「ぐぬぬ」

確かに、という顔をするロザリー。

……同意するなよ。

「まあ、この寮をもっとよくしたいなら、さ。もうちよい路線をインパクト強めにしたら？」

「……ふむ、一理ありますね。お母様はホグワーツ在学中にジエームズ・ポッターやリリー・ポッターと敵対していたらしいですし、姉さまは……」

「姉さまは？ お姉さんがどうしたの？」

「……わりと、やりすぎるところがあるんです。正義感が強いといえ  
ばそうなるけれど、思い込みは激しいし。前に、私をいじめた女の子  
を、殴ったことがあるんです。……しかも、その子の杖で」

「うわ、そりゃひどい」

ロザリーは顔をしかめていた。

「まあ、そんな経験があれば誰も逆らわんなあ。よし、やっちやえ  
ラーニヤ」

「い、いやですよー」

「ええ〜？」

ムスツとして、「もういいよ」と言いながらロザリーは眠りについ  
た。



## 飛行訓練

「い…………っ、う、あ、はあ…………っ」

熱い。冷たい。

なんだっけ。ここどこだっけ？

星が。月が。雲が、空が、綺麗で、ああそうだ、舞踏会。  
くるくる、くるくる、狂狂、狂狂

あ。

後ろから、誰かが。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

久々の、“あの夢”だった。

「ラーニヤ、大丈夫……………？」

「……………ええ」

心配そうに、ロザリーが声をかけてくれる。

“あの夢”を見る理由なんて、明白だ。

あまりにも、あまりにも。

あまりにも。

「今日って、飛行の授業があったよね？ 楽しみい〜」

ロザリーの声とともに、心臓がドクンとなる音が聴こえた。

「箒を上にもー あげてー！」

あがれ、と命令する。

箒はすぐにあがった。

「またがって、三メートルほどですぐに降りてきなさい。いいわね？」

素早く上がって、またすぐ降りてくる。

よし、うまくいった。

「その貴女。うまいわね、ミス・ギルティク。次の段階のお手本になって頂戴」

「……………え」

「なにをしているの？ ほら、早くー！」

周りで拍手が起こる。

くらくらしながら、先生の傍に行って、箒にまたがった。

「なるべくまっすぐ上まで上がって、ゆっくりと降りてきなさい」

はい、と返事をしたのかどうか。

よく分からない。

大丈夫、落ち着いて。

ゆっくりすればいい。  
落ち着け。

「いち、じ、さん…」

ふわっと浮いて、30メートルほど上がる。  
それからゆっくりと降りて、残り10メートルほどになった。

あ。

下、草原だったな、そういえば。

あの時も。

あの時も？

視界がぐるりと反転して、意識が途絶えた。

## 飛行訓練

「……………」

「あら、目が覚めたのね」

マダム・ポンフリーがこちらに振り返る。

「貴女、箒にのってる途中で気絶したのよ。マダム・フーチが申し訳ないって言ってたわ」

「そうですか……………」

一人頷いていると、遠くからパタパタと足音が聞こえた。

「ダンブルドア先生！」

「ああ、ラーニヤ、はじめまして。母親そっくりじゃの」

「よく言われます」

「で、いま、その母親からフクロウ便がきたんじゃ。見なさい」

手紙を受け取って眺めると、懐かしい細く整った文字が綴られている。

「そこに書かれているように、君は特別に飛行訓練をしないこととする。ぎりぎりです。初めての授業に間に合わなかったようじゃがな」

「はあ。でも、そんなことして大丈夫なんですか？」

「かまわんよ、なにせわしが校長なんじゃ」

そういって、校長はいたずらっぽく笑った。

「君のトラウマについては聞かせてもらったよ、ラーニヤ。今は休みなれよ」

校長が去った後、私は眠ってしまった。

六歳のころ、初めて舞踏会に行った。

楽しかったけれど、少し疲れてしまって、体が火照って熱かった。だから、涼むために外に出て、テラスで夜風にあたっているところ  
で。

いきなり、突き落とされた。

突き落とされた、というよりは、放り投げられた、というほうが正しいかもしれない。

一度抱えあげられてから、外に投げられた、と。

痛くはなかった。

ただ熱かった。

それから何か月も寝たきりで、なかなか治らなくて、そもそも治るかどうかが分からなくて。

何もする気にならなかった。

みんなが私に気を使ってくれるのが、余計しんどかった。

私を突き落した男はたまたまそばを通りかかった男で、小者の殺人者だったらしい。

理由はとくになかったそうだ。

まもなく死刑にされたらしいが、私にとってそんなことはどうでもよかった。

動かない体を見ながら、死んだほうがましだと思い続けていた。

「…………ん。すみません、寝ちゃったみたいで」  
「いいのよ。幸い外傷はなかったみたいだけど、立てるかしら？」  
「はい、もう平気です。ありがとございまして」

寮に戻ると、ロザリーがベッドの上で口いっぱいにお菓子を詰め込んでいた。

生半可ではない、もうそれはむしろえげつないと言えるような、常人には理解しがたいほどに甘ったるそうな菓子だった。

「おかえり、ラーニャ。具合はどう？」

「もうだいぶ落ち着いた。ありがと、ロザリー」

「ういうい。あ、ノート勝手に写しといたけど、こんな感じでオツケイ」  
「？」

ほんと投げてよこされた羊皮紙には、分かりやすくまとまった丸い字が書かれている。

「え…………これ、私のために？」

「そうそう、普段からノートあんまし真面目にとってないからあれだけど、ちゃんと分かりやすくなってるっしょ？」  
「……………」

「あれ、ごめん、字汚すぎて読めなかった？」

「ロザリー……………」  
「えっ、ちよっ、うっわっ!？」

思わず、ロザリーの小さな体を抱きしめてしまった。

「この子が友達でよかったと、心から思う。」

「なんだよー、あたし、こんな当たり前のこともしないような奴に見えてたのかよ。ちよっとガツカリー」

「え、あ、ごめ……」

「へへへ、うそうそ。ま、無事に帰ってきてくれてよかったよ」

ロザリーはにいつと笑った。

## 苦勞の始まり

しばらくして、私たちは三年生になった。

去年卒業したライラ姉さまの助言は、「悪役になるのを厭わない」と。

というわけで、私は一年間悪役に徹してきた。

グリフィンドールをあざけりながら争いを防ぎ、ハッフルパフを貶めながらイジメを禁止し、レイブンクローを貶しながら裏口をやめさせた。

スリザリンを支配するのは容易ではないが、いまのところは一応うまくいっている。

唐突だが、ドラコ・マルフォイとは、前に何度か会ったことがある。いわば家族ぐるみの付き合いである。

マルフォイ家とギルティク家は同系列で、少しだけギルティク家のほうが格上だが、ほとんど同列として付き合い合っていた。

だから、三年生となった今年、新入生のマルフォイがきたのを嬉しく思ったのは事実である。

「お久しぶり、ドラコくん。懐かしいな、私のこと、覚えてる？」

「はい、もちろんですよ。ますますお綺麗になりましたね」

「ありがとう。スリザリンへようこそ」

「ごっごりと笑って握手をする。」



こんなになれなれしく話せるのは、ロザリーを除けばドラコくんぐらいだ。

ドラコくんは、私にとって弟みたいな存在だから。

……でも、なんか、ドラコくん、前はもうちょっとかわいかったのに、お世辞まで言えるようになったんだなあ。

嬉しいのか寂しいのか、よく分からない複雑な気持ちになった。

「ドラコくん。一つ、お願いがあるんだけど」

「？ なんです？」

それはそうと、話を本題に戻す。

「グリフィンドールと、揉め事を起こさないでほしいの」

「……なぜですか？」

「ポイントが減点されるのよ。今までずっとスリザリンがトップだったのに、たかがグリフィンドールごときのために一位から降ろされるなんて。そんなの絶対に嫌だわ。だから、ドラコくんに失礼なことを言う人がいても、少し我慢してほしいの」

なるべく納得してもらいやすいように、グリフィンドールへの悪口をおおいに取り入れながら言う。

「いいわね」

ドラコくんは、しぶしぶながらも頷いてくれた。

……これでなんとかなるだろう。

「じゃああつ」

「じゃああつ」

後ろからいきなり胸を掴まれ、思わずおかしな声が出る。

「ちょ、ロザリー、貴女どうしたの!? 長期の休みで頭がおかしくなっ  
たとか!?!」

「んなわけないよーん。ラーニヤは気づいてないかもただとき、去年  
まではライラさんの監視が厳しかったんだよ」

「え? い、う、うそでしょ?」

「マジでマジで。油断も隙もないぜーって感じ? でもっ、これから  
は存分にいちゃいちゃできるね!」

顔の横で指を組み、首をかしげつつ、キャ と目を輝かせるロザ  
リー。

……………私のまわりはこんなやつばかりか、と、ラーニヤは思った。

「ロザリー、そろそろ座りなさい。いくら騒がしいからって、さすがに  
ばれるわよ」

「やだやだやだあっ! ラーニヤの傍がいいのおっ!」

「じら、もう……………また寮で会えるじゃない」

「ずっとなそばに居たいの!」

「こんなテンションの高いロザリーは初めてだ。

熱でもあるのだろうか。

いや、むしろ今までのたるそうな態度よりはマシなのかもしれな  
い。

ちょっと扱いに困るけど、可愛いし。

「何をしているのかね、アルナティア。ギルティクが困っているだろ  
う。席に戻りたまえ」

「うわっ、であ……」

スネイプ先生がいつの間にかそこに居た。

こちらは相変わらずの神出鬼没っぷりだ。

不愉快そうに声を漏らしつつ、ロザリーは耳をふさぐ。

「ちょっと立っただけじゃないですかあ。やだなあもあ、センサーついたらすぐ嫌味言いに来ちゃってさあ。んん？ ドエス？ サドですか？ しかもあたしに目えつけるあたりがロリコンっぽくてやだねー、あたしのろりろり体型に興味があるの？」

「……………ギルティク」

「は、はい」

「友人はよく考えて選ぶようにな」

「すみません……………」

恥ずかしさと申し訳のなさで顔が赤くなっていくのが分かる。

額を片手で覆って冷やすが、本当は穴があったら入りたいくらいだ。

姉さまが卒業したから油断していたが、何のことはない、ただ単純に妹ポジションとしてロザリーが姉さま化しただけじゃないか。

「ロザリー、ごめん、もう本当に席に戻って……………」

「はぁーい。じゃあまた寮でね、ラーニヤ」

とととと、とローブを引きずりながら駆けていく姿は、前と変わらない。

ドラコくんが心配そうにこちらを見ていた。

大丈夫だよ、と返すと、「大変ですね」と言われた。

まっ  
たく  
だよ。

総じて分かること…女運最悪。

「あ、そうだ。ねえラーニヤ」

それはいつもと何ら変わらない、例えば「この服可愛いよねー」とか「新しくお店ができたらしいよー」とか、そんな下らない話題をふるのと大差ない気軽さでの、

重大な報告だった。

「あたし、たぶんこの学校退学になったよー」

「……………え？」

「いやー、ついさっきさあ、あたしってば窓を割っちゃったわけよ。なんかやたらと絡んでくるアホがいたから、ちよこつとこらしめたかったんだけど。まあこれが失敗だったねー、やり過ぎて窓がパリーン  
「!!

大げさに腕を上にあげ、そのままばかりと後ろに倒れこむ。

「まあ、退学になるだろ。あたし色んな……………っかほぼ全員の教師に嫌われてるし」

「そっ、そんな……………」

「仕方ないんだけどねー。完全に自業自得だし？ それに、この学校で好きなものがラーニヤだけってのも、ちよつとどうかと思ってたしさ。合わなかったんだね」

ロザリーはゆるゆると首をふり、肩をすくめる。

「あつ、でも唯一面白かったのがさあ！ あたしがマクゴナガル先生に叱られてる最中に、スネイプがきたわけよ！ で、もうその顔が  
さあ…

満ツ面の笑顔！

超楽しそうなさあ！　いくらあたしを退学にできるのが嬉しいからってwwwあたしのせいで怪我した生徒いるのにwwwその笑顔wwwおいオッサン教師だろwww

つかアンタ、そんな表情できたのかよ！とか、もうお腹痛くってさあ！

笑いこらえるの大変だったんだから!!

ラーニヤにも見せたかつ……た……た……た……あれ？」

ラーニヤのいた場所を見ると、そこには誰もいなかった。

スネイプ先生は、自分の部屋で薬品棚の整理をしていた。

「あの……、スネイプ先生」

「ん？　おお、ギルティクか。どうした？」

「いえ、あの……」

ラーニヤは、うつむいて上目づかいでスネイプをうかがう。

「ロザリー……えっと、ロザリオが、退学になるって聞いたんですけど……」

「ああ。彼女はあまりよろしくない素行をしていたものでね」

何をしたんですか、と私はしつこく食い下がる。

「生徒に危害を加え、窓を割り、その上に反省している様子も見られなかった」

「………やっぱり、」

瞳が涙で潤むのが感じられたが、気にしない。

「やっぱり、ロザリオは退学ですか？」

「……………」

視界が涙で歪んでいて、まともに先生を見られなかった。たたずんでいる黒い影が、ゆらゆらと動いている。

「お前は。母親にそっくりな見た目だが、性格も似ているな」

「……………」

「あの女は、とにかく嫌な女だった。揉め事を好み争いを愛す、そんな女だった。趣味は他人の喧嘩を鑑賞することだと言ってるのけるような、傲慢で高慢な女だった。あの女、いつか覚えてろ」

ぼそりとつぶやいて、スネイプ先生は慌てたように咳払いをする。

……………お母様いわく、「使い勝手のいい男でしたわ。わたくしの大っ嫌いな女に傾倒してさえないなければ、ずうっとこき使ってあげましたのに」だからなあ。

お母様や先生の学生時代はよく知らないが、スネイプ先生がお母様から逃げきれて本当に良かったと思う。

「……………」

スネイプ先生の話には、まだ続きがあった。

「あいつは、仲間のことを、大切にする女だった」

スネイプ先生の声からは、何も感情が読み取れない。

くすん、と鼻をすすりながら、私はまだ下を向いていた。

「……………あいつには、お前の母親には、借りがいくつもあってな。できれば早く返したい。娘であるお前の望みを聞いたとなれば、そのうちの一つは消えるだろう」

「!!! 本当ですか!!!」

「一度だけだ」

嫌そうな顔をして、後ろを向くスネイプ先生。

どつちやらよほどロザリーを退学にしたかったらしい。

「ありがとうございます、先生！ 大好きです！」

「……………媚びを売るのはあまり良くないな」

「本心ですわー！」

何度も「ありがとうございます！」と頭を下げながら、寮に戻った。

「あ、ラーニヤ。どこ行ってたの？ 心配したんだよあ？」

「やった、やったあ！ えへへ、ロザリー、退学しなくてもよくなったんだよー！」

「……………何言ってるの？ 励まそうとしてくれなくても、あたし平気だよ？ そりゃ、たまには手紙とか送ってほしいけど……………」

「嘘じゃないわ！ スネイプ先生に許可とったもの！」

「ふえ？」

ほかんと口を開けるロザリーに、ぎゅっぎゅっとうと抱きつく。

ロザリーはあっけにとられたまま突っ立っていた。

「なんで？ どつちやって？」

「スネイプ先生の部屋に行って、直接お伺いを立てたの！ そしたら、一度だけ見逃してくれるってー！」



「はああ!? あんな育ちすぎ「ウモリ」の巣に一人で行ったの!? 自殺行為じゃんか!」

そんなことなかったけど、と言わないうちに、ロザリーの顔がどんどん曇っていった。

「あたしのせいで、ラーニヤがそんな危ない目にあっただ……」

さつきからロザリーの中でのスネイプ先生はなんなの? と言いたいのだが、ロザリーが半泣きなのでそれも言えない。

「ごめん……あたし、ラーニヤは気にしないと思ってたのに……。まさか、そんな危険なことするなんて……。全然、考えてなかった……、ごめん」

「そんな……謝らなくていいよ、ロザリー」  
「ううん。今、すっごく反省してる」

え、遅くない?

「あたし、もう面倒事起こさない。絶対、絶対だよ。約束する。もう二度とラーニヤをあんな「ウモリ」のところへ行かせたりはしないから」

手を握られてそもも熱く語られては、スネイプ先生に対する認識へのシツ「ミ」もできない。

「あ……でも、これ、どうするの?」  
「うん?」

ロザリーは、私が指差した方向を見て、ピシリとかたまる。

そこには、乱雑にたたまれた服が煩雑に散らかり、トランクに無理

やり詰め込まれていた。

「……ラーニヤ」

「……なあに？」

「……もうさんざんお世話になった後で、あれなんだけどさ」

「……うん」

「手伝って？」

「はいはい……」

## イジメ

「おう、次の時間はへんしんがーく。めんどくさーい行きたくない  
い」

「はいはい、文句言わない」

ロザリーをぐいぐいと押しやりながら、ドラマから出て廊下を歩む。

「……………あゝっ」

「?」

「? なに、どしたの?」

「今、なにか言った?」

「え……………いや、別に」

「言っていないよ、とロザリーは首を振る。」

「昨日勉強してたから、寝不足なんじゃない? 大丈夫?」

「うん……………たぶん、平気」

おかしいな、と首をかしげつつ、ラーニヤは変身術の教室へと足を早めた。

「では皆さん、今日は『動物もどき』について説明いたしましょう」

マクゴナガル先生の声が教室に響く。

カリカリとノートを取りながら、ラーニヤはまだあの声のことが気になっていた。

なんだっただらうっ、あれは。

喘ぎのよじな、呻きのよじな？  
苦しそうな、それでいて

「ラーニヤ、授業終わったよ。次は　　うつへえ、魔法薬学……」

時間割を見て、やだねえと言いながら、ロザリーが駆け寄ってくる。

「……………どしたの？　ねえ、ラーニヤ、本当に元気ないね？　さっきの  
声の……」

「うん……。気のせいだとは、思っただけど」

「分かんないよ？　ラーニヤに聞こえたんだから、ひよっとしたらあるかも知れないよ？」

こてん、と首をかしげるのと同時に、ロザリーのツインテールがにゅるんと動いた。

「あたしが調べといてあげようか。ラーニヤのためなら、あたし、本気  
出しちゃっぜ？」

「え」

「呪文、本当は使っちゃいけないけど。ま、いっか、これは呪文じゃないし」

「ろ、ロザリー、何する気？」

「調べる、んだよ。あのあたりに、使い魔を放つ」

というと同時に、ロザリーの長いローブの下から大量の真っ黒なハムスターが出てきた。

目と口の中が血のよじに赤く、一目で普通でない分かる。

「……………っ」

「行っておいで、みんな。なるべく早く調べてよね」

呆気にとられていると、ロザリーがこちらを振り向いてにやりと笑った。

「安心して。ミセス・ノリスは調教済みだから。いやあ、実にちよろくて可愛いコだった」

「……………ロザリー、貴女、ひょっとしてわりとデキる人？」

「今気づいたの？ ショックだなあ。ふふん、スネイプのクソつまんない授業が終わるころには声の正体わかってるよ」

ローブの袖をぶらぶらと揺らし、

「勘違いしないでよね。これは、ラーニヤのためなんだからね。前回のお礼とかじゃなくて、ただの単なる善意なんだから。お礼はまた今度、三倍にして返すんだからね」

と言っ。

私が笑つものを見て、ロザリーも楽しげだった。

「へーいっ。情報が洗えたよーん」

魔法薬学の授業を終え、ロザリーが自慢げに壁にもたれかかり、ツインテールを撫でつけた。

「声の正体は、レイブンクロー所属のマーガレット・ビジアちゃん  
の悲鳴だね。倉庫に押し込まれてレイプされ、暴行を働かっていた時の  
声かと思われるよー」

「……………は？」

「マーガレット・ビジア、三年生。金髪に灰色の目、すらっとした体

型など、ロシア系？

名家の出身、成績は上の中、無口で無表情、あのスネイプ先生でさえ薄気味悪がって嫌味を言わないという凄い人。あと備考としてデカイね、175cm

「そ、それどこから調べてきたの……？」

「ひ・み・つ」

そんなにかわいい声を出す君を初めて見たよロザリー？

そういつ声をたえ演技でもいいから先生の前で出そうよ？

じゃなくて！

「それ、ダメじゃない！ れ……れい……ぷ……だなんて!!! れっきとしたイジメでしょ!？」

「え、まさか助けるとか言う気？ マジで？」

心底驚いた、というふうにもロザリーが目を見張る。

「もーいいじゃん、声の正体が分かってスッキリサッパリ全部解決一件落着！ ねっ！」

「ダメ！ 確かレイブンクローに、えっと、誰がいたっけ……あ！ ペネロピ さんって人、結構賢かったから、」

「言いにいくってえの？ 『あなたの寮でマーガレットさんがいじめられてますよ』って？ 悪名高きスリザリン生が？」

「っつっ」

唸ってみた。

「……………まあ、いいよ、手伝ってあげる。これはこの間のお返し。イジメなんか、なくすのにいつまでかかるか」

「大丈夫だよ、たぶん、味方が一人か二人いるだけで十分心強いと思う」

から 「

これは、私が寝込んでいた間の経験談。  
ライラ姉さまの存在が、私を励ましてくれた。

「それに、私、新たに呪文作ったし！」

「作ったあ？」

「うん。スネイプ先生にこの前見てもらったからね、『危ないから誰にも言わないほうがいい』って言われたんだけど。何回か練習したし、いけると思っただ」

「へえ……………」

猜疑心あふれる目線で「こちらをみてくるロザリー」。

「ちなみに、どんな呪文よ？」

「えっとね……………」

「ユール・クティールって言って、相手の精神を崩壊させる呪文だよ」

「……………それ、誰に使うのさ？」

「当然、イジメてる人たちにですが？」

「いやいやいや、やばいっしょ。退学なっちゃうって」

「あっ、そうか」

「そうかじゃねえよ！ 気付け!!」

「ごめんごめん、じゃあちょっと怖い思いをしてもらえばどうかな？」

「コンファダスとか良くない？ 錯乱せよってやつ」

「それだいが後に習う呪文だぜ」

「スネイプ先生に教わったよ」

ロザリーが黙って首を振った。  
認めてくれたらしい。

次の時間は休講なので、ちょっと助けに行こうと思う。



## イジメ

「メグちゃあーん、夜までそこで我慢してたら制服かえしてやるよー」  
「うっわww夜まで裸かよwwwカッワイソー」  
「しっかし、コイツの制服でけえなー、どこに隠すべき?」  
「むしろ燃やせばよくね?」  
「うお、名案!!」

またも笑い声が狭い部屋に響く。

「はいはい、お楽しみのところすいませえん」

その笑い声が、ダルそうな声にかき消された。

「自分で彼女をつくることすらできない童貞君たちに朗報でございます。我らがスリザリンの気高き黒薔薇、ラーニヤさまが直々に貴様らを処分いたすー」

「ちょ、ロザリー、そのキャッチコピーはなんなの?」

「今即興で考えた。ピットリじゃね?」

「恥ずかしから止めて」

「ちえー」

「おい、お前らなんなんだよ? スリザリン生か?」

「イエスイエス、まったくその通りだとも、童貞君。ただ、お願いだから君のその汚い顔をラーニヤに見せないでくれるかい?」

「んだと、ガキが……!」

向こうが杖を取り出してきたので、うん、肅清開始?

「エクスペリアームス」

「うあっ」

おお、うまくいった。

杖がばしーんって。

本見ただけなのに、結構できるな。

「いやーん、最高ー」

「ありがとう、ロザリー」

「な、て、てめえ　　」

「コンフアンド、錯乱せよ」

「え？　ひ、い、あああああああああああああ!!!」

「おっ、ラーニヤすごいすごいー!」

「まだまだあるんだよ、ライラ姉さまが教えてくれたのとか  
レダクトー!」

「ぎゃっ!」

「あら、外れた」

杖を振ると、青年の後ろにあった花瓶が粉々に砕けた。

彼らが逃げようとしているが、そうはいかない。

「インペディメンタ、妨害せよ!」

そうすると、彼らが固まった。

「マーガレットちゃんは、えっと　　この中、だね」

ロザリーが気まずそうに指差したのは、掃除道具入れである。  
でられないように魔法がかかっていた。

嫌悪感がふつつつと沸いてくるのを感じながら、呪文を解く。

「アロホモローラ、開け」

がしゃん、と音が鳴って、扉が開かれる。

中に居たのは、体育座りにうずくまった、背の高い女の子だった。虚ろな目で、眩しそうにこちらを見ている。

不安を与えちゃだめだ。

出来る限り、笑顔で。

ただし悪そうに見えないやつ。

「こんにちは、ミス・ビギニア　えっと、もう平気よですよ。ほら、制服はここにありますが。立てますかしら？」

「はあ……、ありがとうございます？」

虚ろな声。

ダルそうなのはロザリーと同じだったが、ロザリーのような人を小馬鹿にした響きでなく、心底面倒くさいというような感じだった。

「っと、あなたがた、きみたち、おまえら？　いや、これはぜったいちがう。あなたがたはだれですか？」

「我らがスリザリンの気高き黒薔薇、ラーニヤさ」

「スリザリンのラーニヤ・ギルティクと申しますわ、よろしく」

「……黒薔薇、らーにょ」

「こっちは同じくスリザリンのロザリオ・アルナティア。ほら、ロザリー、挨拶は？」

「　　よろしく……」

まだ黒薔薇がどこのどこののどこのと言っているロザリーを残し、私は青年たちへと近づいて行く。

「みなさま、御機嫌よう。床に寝そべるとは感心いたしませんわね」  
「ち、近づくな」

「いったい、誰に命令していますの？」

杖を向けると、彼らは小さくヒツと呻いた。

「お分かりいただけたと思いますけれど、もう二度とこんなことはな  
さらないよう。でないと、今度は本当にあなた方の誰かが犠牲になっ  
てしまいますわ。」

そんなの、嫌でしょう？ 私も嫌です。でも、進化に犠牲はつきも  
のですの。付き物というべきか、憑き物というべきか。まあどうでも  
いいことですわね」

そこで一旦台詞を区切って、にっこりと笑う。

きつと、私の悪役顔もあいまって、かなり恐ろしく見えたことだろ  
う。

「告げ口などはなさらないほうがあなた方の身のためですわ。よろし  
くって。」

「くくくくと、一斉に頷いたので、呪文を解除してやった。」

一目散に逃げていく足音が完全に聞こえなくなったところで、マー  
ガレットちゃんに話しかける。

「平気ですか？」

「はあ、だいじょぶだとおもいますが」

「んー、とろい答えだなー。ラーニヤ、これはダメだぜ、何回助けたっ  
てまたいじめられるタイプだよ」

「ロザリーニ！」

「じゅめんじゅめん。マーガレットちゃん？ メグでいい？ 仲良くしよ

うねー」

そういって、ロザリーが左手を差し出す。

明らかに挑発と思われるロザリーの言動（本人にその自覚がないのが一番の問題）にも気を悪くしたふうはなく、メグちゃんは普通に握手した。

少し感受性の鈍い子なのかもしれない。

「じゃ、あたしらはこれで。さいならー」

「さよなら、ミス」

「メグでいい」

「……ありがとう、メグ」

部屋から出て、もう一度後ろを振り返った。

メグが頭を下げていた。

ああ。

あの子は、感受性が鈍いわけじゃないんだ。

だって、ちゃんと、人間らしい感情があるんだから。

感謝は、素晴らしい感情だ。

「あー、楽しかったー。メグたんも無事助けられたし。収穫はとくになかったけどねー」

「そう？」

ロザリーの言葉に対し、自然に、頬がほころんだ。

「新しい友達が、出来たじゃない」

## 番外編

愛やら恋やらは嫌いだ。

そのいかにも素晴らしいという風にみんなが語る恐ろしい病は、確実にさまざまの人の心を蝕んでいく。

臆病になり、疑い深くなり、怒りやすくなり、人格は狂い、まったくの別人になってしまう。

最も恐ろしいのは、それがいかに恐ろしいかをみんなが軽視していることだ。

若いうちにはよくあること？

なんだそれは。

だから早く治療が必要なんだ。

かといってその治療法も治療薬もない。

だからこそ、もう少し慎重になってもいいのに、とは思っ

恋も愛も結局は欲から来ている。

性欲、保護欲、独占欲、支配欲、所有欲、

そんな汚い快感と優越感の入り混じった欲からなる恋愛感情が、美しいものであるはずはない。

聞いたところによれば、そんな汚いくだらない恐ろしい病に侵されたまま一生を終える人間もいるとか。

可哀想に。

別に同情してやる義理もないが、あたしはいつもそう思っ

う。  
ああ怖い。

春夏秋冬、この世は汚いものばかりだ。  
どろどろに汚れきった世の中で、誰もが下心丸出しで生きている。  
そんな目でこちらを見るな。  
別に何もやらんし貰わんぞ。

真に美しいのは友情だ。

何も見返りを求めない自己犠牲、同性同士の純粋な感情。  
なんて素晴らしい。

問題はあたしに友達がいないということだ。  
それは仕方ないと思う。

あんな、こちらに石を投げてくるような、猿のような糞餓鬼共と馴れ合いたくはない。

あたしまで猿だと思われるのは御免だし。

かといって、ホグワーツならもう少しマシなのがいるかということ、  
そうは思えない。

なにせ、あんな尻軽の上に頭まで軽い母親と、根暗で気色の悪いス  
トーカー親父のいたところだ。

果たしてあたしに友達はできるのだろうか。

こんな偏屈な、厨二病全開のチビのそばに居てくれるようなお人好  
し。

。そんなお人好しが、一体どこの世界にいるのだろうか。

「……………うおっし」

いつも通りの時刻に目が覚める。

時計をチラ見。

四時だった。

低血圧なので、早めに体を起こしておかないといけないのだ。

ラーニヤはまだすやすやと寝息を立てている。

そう、あたしこと、

ロザリオ・アルナティアの友人である。

お人好しの権化のような人物だ。

顔を洗って、一足早く制服に着替える。

自分の細い腕やら足やらを他人に見せるのは嫌いだ。

よわつちさがますます目立つから。

菓子を大量に口に詰めこみながら、カバンを漁る。

えーと、今日の時間割は……………。

ぐおおお！

すねーぶの授業が一时间目から……………！

…………… 仮病で休んでやろうか。

いや、それをするとラーニヤに叱られてしまう。

しかし、なぜ朝っぱらからあんな奴の顔を見なくちゃいけないんだ

？

吐き気がする。

頭がズキズキしてきた。

いかん、なんてことだ、本当に気分が悪くなってきたぞ。

さすがすねーぶ、次から授業を休みたいときはあいつの顔を思い出  
すでしょう。

「ん……………」



「……………？ ごめん、ラーニヤ、起きた？」

「ろぞりー、べんきょうしなさい……………」

「……………」

寝言だった。

なんてことだ、寝言で叱られてしまつとは。

そうまでされては仕方ない、勉強をするとしよう。

魔法薬学の予習は却下だな。

吐き気がするし。

えっと、たしか歴史の課題をまだやっていなかったはず……………。

しばらく課題をしていると、ラーニヤがもそもそと起き上ってきた。

「おはよ、ロザリー……………。ふぁ」

「おはよう。よく寝れた？」

「うん、まあまあね。あれ、ロザリー、それ……………」

「歴史の課題を、ちょっとねー」

「!! 偉いわ!!」

目をらんらんとさせ、ラーニヤがあたしの手を取る。

凄く喜びようだった。

「どうしたの!!」 ロザリー、貴女いつもは提出日になってからやるの

コト!!

「あいちゃ……………。そうだったっけ？」

「そうよねー」

「アタシはイツモ真面目アルよー……………」

理由を聞きだすのはやめたようだが、ラーニヤはずっと『偉いわ』と繰り返していた。

「ねえロザリー、一時間目はなんだったかしら？」

「一時間目はね、魔法やくがk……うえっうえ」

「ロザリー!？」

危つく吐くところだった。

「どうしたの？ 医務室に行つて、マダム・ポンフリーに……」

「へーきへーき。だいじょーぶい」

よく考えたら、朝、寮監であるすねーぷとは毎日会つはずなのだが、あたしはいつたどこを見ていたのだろうか？

あんな、真つ黒い巨大コウモリ……おえーっ、もといすねーぷがバサバサ動いてたら、気づくだらうに。

「はやくメシ喰いにいこー、ラーニヤ」

「そうね。……ねえ、本当に平気？」

「うん、ほんとだつてば」

あー、らあにゃんには癒されるなあ。

可愛いなあ、優しいなあ。

嫌なこと、全部わすれられちゃっつよ……。

すねーぷ？

誰だっけ？

「あー、朝飯ウマ〜。甘いもん食つと目が覚めるよねえー」

「さっきも食べてたじゃない」

軽くラーニヤが笑う。

女神のような笑みだった。

天使というべきかもしれないが。

普段は少し冷たい印象を与えがちな容姿も、笑うととても無邪気に見えた。

長い睫で縁取られた翡翠色の眼は三日月形になり、健康的な赤味が頬にさし、薄桜色の唇が可愛らしい言を紡ぐ。

つまり言いたいのにはらあにゃん万歳。

「そろそろ教室に行こう？」

「うぎゅ？ もうそんな時間？」

地下牢へと移動。

グリフィンドールの双子がラーニヤに向かって手を振った。

うつぜえ、色目使ってんじゃねえよ。

鏡貸してやるからそれ見ろや。

「アルナティア」

「じっおっ？」

見上げると巨大コウモリがいた。

あれ？

なぜに？

「授業中によそ見とは………どうした？ なにか重要な発見でもあったかね？」

「え、うおっ、はい。いや、いいえ」

いつのまに授業が始まったんだ？

おかしいな……。

「ほら、黒板に説明があるから」

「あ、ラーニヤありがとー」

「もう……」

すねーぷが教室中を移動する。

効果音をつけるなら……。

そうだな、バサーツかもしれない。

「うああっ」

「あっ」

大量のネズミの脾臓が鍋の中へダイブした。

黒板には、《ネズミの脾臓は一つまみ》と赤字で強調して書いてある。

「チツ、いいんだもん…… かまわねえよ、多少は……」

「その思い上がりが貴様の成績の悪さを裏づけしている。これはこれは…… ひどいな。」

黒板の字がよめないか？ 赤が目立たないなら、我輩は何色を使え

ばいい？」

「ギにいいー……ッ!!？」

「やかましいぞ、アルナティア。罰則だ」

あたしが魔法薬学の授業で叫ぶのはよくあることなので、誰もこっちを見ていなかった。

例外として、ラーニヤだけは心配そうにこちらを見てくれている。

「む……ギルティクは素晴らしいな」

「ありがとうございます、先生」  
「皆もこちらに来て、よく見るように。……まあ、すぐ隣のものがあれだから、見たところでよくなるとは思えんが」

ふん、と笑われた。

畜生……。

卒業したらその記念に、頭を食いちぎってやる。  
いや喉笛をかみ切るか？

唯一、ラーニヤをお気に入りしているところだけは評価してやるが……。

とっていると、チャイムが鳴った。

「宿題、先ほど配ったプリント集を明日の授業で提出。では終了」

ようやく済んだか。

「アルナティア、罰則として五時に我輩の研究室に来るように。薬棚の整理をしてもらおう」

ぐあっ！

「ロザリー、次はルーン語だよ。行こう」

「ううー」

ルーン語と言えば、確かメグもいたはず。

メグなあ……。

いい人なんだけど、やたらラーニヤにすり寄るんだよなあ。

ラーニヤは気にしてないみたいだけど、あたしは気になる。

「……………おはよ」

「あら、おはようメグ。具合悪そうだけど、平気？」

「いつものこと……………」

メグは常にアタマが痛そうだ。

多分、偏頭痛もちなのだろう。

銀縁眼鏡の奥の灰色の眼が、虚ろにラーニヤを見ていた。

ルーン語の授業中、メグはラーニヤにずっとくつついていた。

座るにしたってそんなに密着しなくていいでしょとか、教科書忘れ  
たっつってそれ絶対わざとだるとか、色々言いたかったが黙った。

アタシえらい。

その後は歴史があって、変身術の授業があって、いつも通りだった。

「いやー、おわったおわったあ……………」

「ロザリー、罰則は？」

「ぐぬっ」

忘れてた。

「ちゃんと行かなきゃダメよ。また増やされるだけなんだから」

「はぁーい……………」

くっそー、嫌だなあ。

すねーぷの研究室ってそもそもどこだったけか？

「案内してやるうか、ロザリーちゃん？」

「てめえピーブス、なんでこんな時だけ親切なんだよ」

「そりゃ、オレは生徒のみんなが大好きだからねえ」

にやにやと笑いながら、ピーブスは浮遊している。

「ついたぜ子猫ちゃん。ゆっくり楽しむといい」

「死ねよ」

「もう死んでる」

イライラしながら、研究室のドアを乱暴にたたいた。  
いや殴った。

「せんせー、アルナティアでええーす。罰則のためにきましたあああ」  
「よろしい、入れ」

いつ来ても気味の悪い部屋だった。  
暗いし、じめじめしてるし。

すねーぶの巢にはびつたりだ。

「その棚を整理して、それから瓶を磨け。割ったりせんように」  
「はあい」

次の瞬間から、すねーぶのねちねち攻撃が始まった！

「まったく、ギルティクの趣味には呆れるな……自身が優秀だと、傍に  
欠点となるようなものを置いておきたくなるのか……？」

すねーぶはにやにやわらった！

「コマンド

むしする

「おいおい、棚の整理すらロクにできんのか……スリザリンの面汚しだな」

「コマンド

むしする

「お前がなぜギルティクに執着しているのかは知らんが……。大方、あやつが優秀だからだろう？ 浅ましいお前はその恩恵にあやかろうというわけだ……。いやはや、なんとも……」

イラつきがピークに達していたが、とうとう、この一言でキレた。

「そういうアンタは、好きな奴いねーのかよ」

ぼそりと言った独り言なのだが、すねーぷの耳にはバツチリ聞こえただろう。

かまわない。

むしろ殴りかからなかったのを誉めてほしいくらいである。

「まあ、仮にも、あの”スネイプ先生さまさまですしい？ 恋愛とかはしたことはないし、興味もないんでしょうね？」

すねーぷからの反応はない。

「だあって、気持ち悪いですもんねー、ああいうの。狂うつつーか、イカれるつーか。したら最後、みいんなおかしくなっちゃってさあ。どうかしてるぜ。そんなもんのために命賭けちゃうとか、マジで馬鹿みたいじゃねえ？ どう思いますう？」



「……………ああ、我輩も同意見だ」

「それはそれは。クールでドライなご感想ですな」

瓶をせっせと磨きながら、すねーぷの方を窺う。

いつもとなんら変わらないが、なんだろう、少し台詞に違和感があつた。

普段のすねーぷなら、もっと嫌味な返答をするはずだ。

それが言葉使いの乱れを指摘して、罰則を増やすとか……………。

……………まあ、いいか。

「とつとつと。すんませーん、もう全部終わりましたけどお」

「そうか。もういい、戻れ」

「はぁーい。おやすみなさい、先生」

なんか、やっぱりすねーぷがおとなしい。

昼にはいつも通りだったのに……………。

夜は眠いんだろうか……………。

え、でも巨大コウモリなのに？

「……………先生、だいじょぶです？」

「なんだ、この程度の罰則では不満か」

「いやすいません寝ますごめんなさい」

気のせいだったかも。

うん、多分気のせいだ。

早くラーニヤに会いたいなあ。

シャワー室に寄ってから、着替えて、パジャマ姿で寮へと走った。

「台言葉……えと……そつだ、”誇り高き魔法族”!!」

普段滅多に走らないせいで足が痛くなってきたが、気にしない。

「ラーニヤ、ただいまっー!」

「おかえり、ロザリー。罰則は済んだの?」

「うん、バッチリ。えへへ、ラーニヤ、ラーニヤっ」

「なあに? きゃっ」

ベッド上のラーニヤに抱きつく。

ちよつと驚いていたが、ぽふぽふと頭を撫でてくれた。

……ラーニヤなら、さっきの質問になんて答えるだろうか。

「……………ね、ラーニヤ」

「ん?」

「愛とか恋とか、そついつのついでにっと思っっ?」

「……………いきなり難しい質問するなあ」

苦笑しながらも、ちゃんと考えてくれるあたりがラーニヤらしい。

一分ほどして、答えが返ってきた。

「やっぱり、楽しいものなんじゃない? よく分からないけれど……、

そつでもなきゃ、こんなに流行らないと思っな」

「楽しい…………?」

「そつ。私は婚約者がいるから、恋愛禁止なんだけど。でも、うん、相手のために何かをするって使命感、背徳感とか……。相手が浮気をしたとかしないとか。疑心暗鬼で一喜一憂、みんな、楽しそうにしてるじゃない」

「……………あたしには、よく分かんないな」

「私だって分からないよ。だけど、真に大切なのは理解じゃなくて和

解だからね。分かり合えなくても許し合うの  
「ふうん……」

例えば、ストーカーに刺されたりだとか。

好きな女を刺して、自分も死んだりだとか。

妻が刺されたと聞いた瞬間、子供を慰めるわけでもなんでもなく自殺未遂をしたりだとか。

偶然見つけた引き出しには、妻の学生時代の隠し撮り写真が大量に保管されていたりだとか。

そういう、いわゆる『純愛』を、あたしも許せる日が来るんだろうか。

母さんや父さんと和解することなんて、無理なように思っけれど。

「ラーニヤ、大好き」

「また唐突だね？」

あはは、と頭上から声がふってきた。

「私もロザリーのこと、好きだよ。親友だしね。また明日」

「うん、おやすみ」

ベッドに潜って、さっきの言葉を反芻する。

たっぷりと幸せな気持ちを味わって、あたしはいつものおまじないを唱えてから目を閉じた。

“ 今日もありがとう、明日もよろしく”